

秋元松代

それぞれの場所



それぞれの場所

秋元松代

早川書房

秋元松代

1911年、東京生まれ。劇作家。主な作品に「村岡伊平次伝」、「常陸坊海尊」(田村俊子賞)、「かさふた式部考」(毎日芸術賞)、「アディオス号の歌」(紀伊國屋演劇賞)、「七人みさき」(読売文学賞)、「近松心中物語」(菊田一夫演劇大賞)がある。

著書 『秋元松代全作品集』(大和書房)、『戯曲と実生活』(平凡社)、『氷の階段』(朝日新聞社)、『常民の発見・菅江真澄』(淡交社)、『菅江真澄』(朝日評伝選・朝日新聞社)

〈検印廃止〉

それぞれの場所

一九九二年十二月十日 印刷
一九九二年十二月十五日 発行

著者 秋元松代

発行者 早川浩

発行所 早川書房

東京都千代田区神田多町二一
電話 東京 三五二三二(大代表)
振替 東京・六一四七七九

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

©1992 by Matsuyo Akimoto

定価はカバーに表示してあります

Printed and bound in Japan

ISBN4-15-203546-3 C0095

それぞれの場所

装幀／多田 進
装画／松本孝志

目次

I

それぞれの場所 9

短い冬 13

芝居 17

木の別れ 21

墓を訪ねる 25

家の外 29

梅雨のころ 32

パリ祭 40

落葉日記 46

村の早春 53

Ⅱ

裁ち鋏 59

きもの 63

柴犬「どうぞ」 68

作家志願 73

ある日曜日 83

東慶寺再訪 88

夏の終り 93

大師みち 97

Ⅲ

退屈だからといって… 105

遠い昔の思い出 108

芝居の群衆 111

親と子の関係 114

誕生日 117

IV

「野鴨」——私の一冊 123

青果・十郎 127

好きな詩 132

雪と曼珠沙華 137

きぬという女のこと 142

近松世話浄瑠璃のこと 146

断片・おさん茂兵衛 150

梅川という女 155

人形遣い 161

V

下北の虹と馬 167

雪の宿 174

泥湯の尾長鶏
181

八木山越え
186

袖とり神
195

くちびわ
201

がじゃの花
207

初冬の旅
213

牛滝まで
220

旅をした十年
231

物部の女面
236

山の小僧
240

あとがき
243

それぞれの場所

落着いて本を読んだり、気ままにぼんやりして居られるところがほしいと思っていたときに、たまたま古い知人が建てた家があったので借りることにした。山梨県の小さな町のさらに町端で、村という方がいいようなところだった。家といっても木造の長屋式に出来た一棟で、その端れの一軒である。新築したばかりで私が最初の借手になった。陽をいっぱいに受けて静かなのが気に入って、本や身のまわりの物を運びこんだ。初めは東京の自宅とここを行ったり来たりの生活だったが、いつかこちらが常の住まいのようになった。

ここはいうところの過疎村で、廃校になった小学校の跡地である。標高七百六十メートルとかの丘で、冬は寒さがかなり厳しいし雪もよく降るが、私は寒さがあまり苦にならない。夏の涼しいのがありがたかった。

この跡地を含めて丘ゼンたいでは一万何千坪とかいう。それをそっくり買いあげたのが、私

の家主でもある人で、東京で画商を営んでいる。彼がオーナーになってここを芸術村という名前のところにした。

丘のほぼ中央に三階建二十八室もある瀟洒なフランス風の建物がうち建てられている。画家のための貸アトリエに設計されていて、長く滞在して制作に専念できるようになっている。オーナーの話によると、パリのモンパルナスとかいうところにあるラ・ルーシュという建物を手本にしたのだそうで、外観も同じようにしたという。名前も同じくラ・ルーシュ（蜂の巣）と名付けられている。

パリの蜂の巣からは、スーチン、シャガール、モジリアニ、その他の天才蜂が飛び立ったので、ここもそのような期待と意図によって創立したのだとオーナーは説明した。そして私にも長屋の方でなく、こちらの方へ住むことを望んでいるらしい様子だった。

建物の部屋々々を見て歩くと、どの部屋からも甲斐駒ヶ岳、薬師、観音、地藏という蜂の連なりが迫るように聳えて、なかなかの景観である。わざわざ窓際に寄らなくても、部屋のどこかの隅にいても、山がすぐそこにある感じがする。画家にとっては清冽でいいのかもしれないが、私はやはり木造の長屋の方に住みたかった。

本場の蜂の巣は町の中だそうだし、たぶんもう古びているのだろうと思うが、こちらの方は真新しく毅然として過疎の丘に立っている。私は朝夕に眺めながら、勝手に蜂の巣館と呼んで

いる。私の借家とは距離もあるし、直接のかかわりはないが、いずれ館に天才蜂が住むような時が来るかも知れないと思う。

広い敷地の隅に、小学校創立百周年記念の石碑が残っている。碑文にはここで民家を教室にして読み書きを授けたのは明治四年としてある。もともと僻地だったから、小学校になっても学童の通学区域はばらばらに遠い。散歩のうちにその通学路だったという山道を歩いてみたが、急な斜面を沢へ降りる細道で、はるかな川べりに小さく集落がみえる。

今も村に一軒しかない煙草屋のおばさんの話によると、先生は授業が終ると、生徒たちに枯木を集めさせ、風呂をたてて生徒たちを入浴させたという。昔は家ごとに風呂をたく農家はめったになかったので、子供らは垢まみれだったし、みんなで入る風呂が楽しみで学校を休む子がすくなくなっていたという。

いまの学童たちは、過疎村といっても農家の暮らしにはゆとりができて、身綺麗なスポーツウェアを着て、スクールバスで町の小学校へ通学している。

もと小学校だった名残りに、広い敷地のへりに沿って植えられた六十本ほどの染井吉野がある。ある年の六年生たちが卒業記念に苗木を買って植えたのだという。いまでは一抱えもある巨木になっている。季節には一斉に開花して、蜂の巣館をとり囲む大きな花環のようになる。オーナーもこれが自慢で、ヘリコプターを飛ばせて空中写真を撮らせたりする。桜見物に遠く

からマイカーで人々が集まり、テレビ局が撮影にくるといふ賑わいである。

先年の花時のことだったが、敷地の外の道を歩いていると、荒地の叢にピクニックシートをひろげている四、五人の年寄りがみえる。老女をまじえた農家の老人たちである。お花見の席を作るらしいが、そこは桜のある敷地をぐるりと囲った長いフェンスの外なのだ。中へ入れればもつとよい場所がある。

「こんにちは」と声をかけると、年寄りたちも挨拶を返した。お花見なら、と私は、向うの門から庭内に入れば、桜のすぐ下でお花見ができますよ、誰が入ってもかまわないのですから、と言うと、年寄りたちは顔を見合せてから、この方が気楽でいいという。そして、あの桜はわしらが卒業記念に植えた木だもんでね、花見にきたですよ、という。

どの人も七十歳を越した年恰好である。私はおどろいて、それならなおさらのこと、中にはいい場所がたくさんありますから、とすすめてみた。しかし誰にも同意の様子がなく、黙って弁当包をひらき始めた。言わでものことを私は言ったようだ。

短い冬

手紙を出しに蜂の巢館やかたの事務所へ行くと、ここの桜はいつ咲くのかという電話をかけてきた人があります。東京ではもう咲き始めたそうです、と係の人がいう。まだ二月だというのに季節はずれに生まあたったかい日が続いた。このまま春になってしまふとは思わなかったが、今年の冬は短く終りそうだった。

一年のうちで私のいちばん好きな季節は冬で、とくにこの過疎村の借家人になってからはそうである。豪雪地の人は腹を立てるに違いないが、私には冬の去るのが惜しまれる。ひとつには、この冬中にしておきたかった宿題を抱えていたせいでもある。

夏のうちから計画をたてて心づもりをしてきた。とは言っても別に変わったことをしたわけではなく、壁ぎわに積みあげたままになっていた本を読みたかったのだ。追い立てられる仕事を持たなかったのが幸いで、この冬中に、その一山はすっきりと低くなった。

本を読んだからといって、かくべつ賢くなる筈もないが、それなりに緊張した時がつづいて、気持ちよく冬をすごした。たまたま東京の人から電話があつたりして近況を話すと、ぜいたくな暮らしですね、と言われる。でも、少しはぜいたくをさせて下さいと、私は心中に呟く。

ずっと前に読みあげて、もう一度よく読みたいと思ひ続けてきた宿題も、多少は果すことができた。いかに若さの氣負いで駆け抜けて来たとはいへ、ずいぶんな思ひ違い、読み落としをしてきたかに、呆れ、よくもすいすいと通り過ぎてきたものだと思う。しかしまた、そんな若さの非情とどんよくさを懐しいものにも思つた。

冬のあいだは、この芸術村という名の丘にもほとんど見物人の訪れはなく、蜂の巣館へ来る画家も少ないらしい。雪山を描きにくる元氣な画家もあるが、早目に引揚げて行くようである。静まりかえつた館は、厚い根雪の中に立ち、裸木の桜の老樹にかこまれて、真つこうから北風にさらされている。夕日に染められると、高い屋根からどつと雪が滑り落ち、どこかの硝子が鋭く碎け散る。冬と戦つて手傷を負っている小氣味よさである。

こんな僻地にいると、本を探しにちよつと神田までというわけにいかないの、目錄をたよりに注文すると、古本の値上りにびっくりする。それでも荷がつくと、籠城へ兵糧がとどいたようにほつとするが、長年の宿題を果そうとして、さらに宿題を抱えこむようなものでもあつた。